

平成26年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	日本社会の環境観・災害観に関する歴史的研究 —環境意識と環境教育のあり方を考えるために—
------	---

研究代表者

氏名 下村 周太郎	所属 人文社会科学系 人文科学講座	職名 講師
--------------	----------------------	----------

研究分担者

氏名	所属	職名

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度)

2000年代に入り、日本史学において中世を中心に環境史や災害史と呼ばれる分野が確立しつつあり、歴史社会における自然と人間の関係について解明が進んでいる。しかし、歴史学では社会経済や政治制度に関心が向けられ易いため、自然をめぐる人々の心性、言わば環境観・災害観については未だ研究が進んでいない。

特に昨今、「昔の人は自然と共生していた」、「昔の人の生活は環境に優しかった」といった没歴史的な過去賛美の印象論が巷間に溢れている。これに対し学術的立場から検証を積み重ねることが、従前からの環境問題に加え3・11という大災害を経験した今、人々の環境意識やその基盤となる環境教育のあり方を考える上でも急務と言えよう。よって、本研究では歴史資料の具体的分析から前近代の環境観・災害観の特質を考究し、歴史的視点から環境・災害をめぐる今日の問題の所在を展望することを課題とした。

そして具体的には、自然観として、前近代の人々の樹木をめぐる観念やイデオロギーについて、中世を中心に分析を加えた。巨木や大樹を尊ぶ日本人の「伝統」が言われるが、一方で樹木は燃料や建材として伐採・争奪の対象であった。資源需要と保護とがせめぎ合う心性を、伐採を禁止する法令（伐採禁制）に見える法理や方便に注目することで考察した。その結果、中世前期の荘園制的な樹木伐採禁制と後期の軍事的な竹木伐採禁制について、それぞれ異なる論理を明確にするとともに、両者をつなぐ状況が南北朝内乱の戦時下で生じていたことを指摘した。その上で、伐採禁制をめぐる理論的問題について、無主・無縁の論理を重視する見解に対し、有主・有縁の論理に留意し、結界・結縁という観点から展望した。

今回は自然観を中心として研究を進めたため、災害観については十分に追究できなかった。研究を通じて、「天災」・「人災」の観念の検討の重要性を感じている。現代社会ではあらゆる災害において人為的要因を探索する志向性が強いが、この感覚自体は科学技術文明の発達と表裏であると考えからである。「天災」・「人災」観念の歴史的水脈を、宗教史料や政治史料から析出する必要がある。こちらに関しては、引き続き、関連する史料や文献の収集を進め、検討していく予定である。

研究成果発表方法

[発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。]

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

- ①口頭発表（単独）：「中世における樹木観・竹木観の展開 一伐採禁制を中心に」
考古学と中世史研究会第12回シンポジウム、2014年7月5・6日、於・帝京大学文化財センター
- ②論文（単著）：「中世における樹木観・竹木観の展開 一伐採禁制を中心に」
『考古学と中世史研究 12 木の中世』（仮称）、高志書院、2015年7月刊行予定